

# お寺の社会性

— 生臭坊主のつぶやき —

四

竹中尚文

## 1. ラスト・リゾート

今年の3月の初めに大阪でイーグルスのコンサートに行った。お気に入りの“ラスト・リゾート”の演奏がなかったのが残念だった。この曲についての思い出は、1980年代の頃だった。当時、院生を対象に研究費支給の募集があった。パキスタンの仏教遺跡を調査したいと希望を出したら採用になった。そんなわけで、パキスタン領のアフガニスタン国境沿いをウロウロした。そこは当時も政情・治安不安定な地域であった。毎日、銃声を耳にしていた。ある日、自分の身体の近くを弾丸が通過する音を初めて聞いた。死ぬかもしれない、と思った。パキスタンのペシャワールの街角でカセットテープを一本買った。アラビア文字で

書かれたイーグルスのヒットアルバム“ホテルカリフォルニア”だった。どのような機械でダビングすれば、こんなに悪い音質になるのだ、と思いながらも持参のウォークマンで聞き入った。このアルバムの中で、特に気に入ったのが“ラスト・リゾート”だった。

曲はロック・バラードである。歌詞はおよそこのような内容である。

彼女は夢を持って旧世界から出てきた。山の中で素朴な人々が微笑んで暮らしている。彼らはそこをパラダイスと呼んで愛した。ある時、金持ちがやってきてその土地を買い占めた。そして繁栄した。カワイイ人たちが戯れ、権力を貪り、金持

ちが土地を買い占め、醜悪な箱を作った。神の子はそれを買ってパラダイスと呼んだ。彼らは主が来ると言い、日曜の朝には、神の名の下にそれをたたえ、パラダイスと呼んだ。どうしてそうなるのか解らない。そんなものには、もう別れを告げよう。

英語の歌詞に対する私の誤解もあるかもしないが、このような歌詞である。当時、私は打ちのめされたような思いで聴いた。私は何処に行けばいいのか、私は何処に帰ればいいのか分からないと感じていた。一緒に大学を卒業した友人達が結婚をし始めた頃だった。そんな年頃の私は荒涼たる土地に一人で「自分には帰る家がない」と言うようなことを思っていた。「還るところ」と言うのは、多くの宗教が人々に提示しているものである。また、その概念が多くの人々の琴線に触れるのだろう、いくつかの歌詞で **promised land** という語を耳にする。

一方、この“ラスト・リゾート”はキリスト教、と言うより仏教も含めた既存宗教への痛烈な批判であると私は思った。純朴な人々の心を利用する宗教という構図が示されたように思えた。このアルバムのヒットは 1980 年前後だったように思う。これは社会

が宗教や教団を信用しなくなった時代を映しているのかのようである。

この頃から、ある人は無宗教を標榜し、ある人はカルトに入ってしまった。1990 年代に「オウム真理教」が問題となった。その原因の一つに既成宗教のあり方を指摘された。その批判は当然のものであった。一方でカルト宗教と無宗教も表裏一体の関係ではないかと想像する。その原因としてはやはり既成宗教の態度であろうし、私たちの暮らす社会の変質でもあろう。

## 2. 個人的な宗教

社会の流れを俯瞰的に見ていく中で、宗教の存在価値を見いだせず無宗教を標榜する人たちが増えた。人生に於いて、宗教の必要性を感じることなく生涯を終える人もある。

大きな災害があったときに、人知を越えた力が愛する人の命を奪っていく、と言う表現を耳にした。愛する人の命が失われるのはいかなる時にも、私の力を越えている。自分の力で抗することが叶うなら誰しもがそうする。死は私にも、愛する人にも訪れる。妻の死、それだけは勘弁してくれと言いたい。ありがたいことに妻は健在であるし、妻の

死などと言うものは想像もしたくない、と言うのが本音である。

そんな私が、いろんなお葬式に呼ばれる。子供のお葬式にも呼ばれる。親は20代であったり、80代であったりする。親にかける言葉をさがすが、いつもこれと言った言葉が見つからない。計り知れない悲しみの中にある人に、どんな言葉を語りかけようとも通じないような気がする。

数年前、20代の男性のお葬式に呼ばれた。まず遺体が家に帰ってきて、私は枕経に参った。三人兄弟の兄二人は泣いていた。母親は茫然自失であった。父親は涙をぬぐいながら母親の状態を気遣っていた。私は、言葉をかけるどころかこの家族の誰一人に対しても正視すらできなかった。翌日の通夜、翌々日の葬儀、私はお経をあげる外に何も出来なかった。

話しはそれるが、私は「お経をあげる」と書いた。お葬式で私はお経を読まない。この場合 read ではない、sing でもない。chant なのである。別の説明をすれば、「如是我聞」を「われかくのごとく聞きたまいき」と言えば、経を読んでいるのである。「によぜがもん」と言えば、お経をあげているのである。

話しを戻そう。お葬式が済んで、七日参りが始まった。七日参りと言うのは、お経をあげて「法話」をする。法話というのは仏様について、仏法について話すのである。私は自分が何を話しているのかではなく、聞き手の心持ちを想像するようにしている。この時、改めてこの家族の悲しみにたじろぐのだった。

三七日(みなぬか)か四七日(よなぬか)のことだった。母親に、時間の経過が慰めになると言うこともあるが、息子さんが亡くなった悲しみはずっと続きますよ、というようなことを言った。私は50年も60年もの間、子供のことを思って手を合わせている親の所にお参りしていることを話した。

息子が「ただいま！」と言って元気で帰ってくれば、この母親の悲しみは消えるだろう。『阿弥陀経』に西方十万億仏土という距離の所に極楽浄土があると説かれる。それは、私という人間が会いに行くことが出来ない距離である。また、人間として帰ってくることも出来ない距離を意味するのである。死を取り消すことは出来ない。

また、この経典は極楽浄土の様子を語る中で、「赤い色は赤い光をは

なつ」と説く。あたりまえのことを、あたりまえに受け入れる、というのである。私たち人生の中で“あるがまま”を受け入れることのすばらしさを学ぶ。しかし、愛する人の死を受け入れることはたやすいことではない。

仏教というのは、「仏になる教え」である。あたりまえと言えはあたりまえなのだから、仏教の特性を表す言葉である。キリスト教は「キリストは我々がいかに生きるかを教えた」のである。いかに生きるかと言うのだから、生き方に是非がある。仏教は「仏に成る」と言うのが究極の目的であるから、それに至る方法はいくつかある。それぞれ頂上を目指す道は自分の歩む道が最も優れていると思っているが、他に道はないとは誰も思わない。とにかく、仏教の目的は成仏なのである。

「あなたは仏に成りたいか？」と尋ねると、「分からない」と答えが返ってきそう。あなたに死が訪れる時、あなたは仏に成りたいか？」と尋ねても、「分からない」という答えかもしれない。「仏と成ったら、人間を救ったり、見守ったりすることができるよ」というと、答えは変わるかもしれない。愛する

人間をのこしてきたら、私は仏に成りたい。私が妻を遺して死んだなら、必ず仏に成って見守ってほしいと思っている。

あなたの愛する息子だからこそ、仏と成ってあなたを見守るのである。

### 3. ティアーズ・イン・ヘヴン

エリック・クラプトンのファンは多いし、この“ティアーズ・イン・ヘヴン”をお気に入りにあげる人も多いだろう。事故でなくなった4歳の息子に語りかける曲である。

天国で会ったなら、僕のこと分かるだろうか？天国で会ったなら前と同じだろうか？そのためにもそこにふさわしくない僕は強くなれないといけないし、頑張らないといけない。

と言うような歌詞である。天国で再会するのである。仏教でも再会を説く。『阿弥陀経』で「供会一処（一つ処に会うことともなりき）と言って極楽浄土での再会を説く。再会というのは、遺族への慰めではない。愛する人の死に際して、「なんで死んだの？」「何処に行ったの？」

の問いをよく耳にする。一方は死の意味を問うのであり、仏教的には生死の意味を問うのである。また、本当に愛する人が何処に行ったのかを問う時、私も同じ処に行きたいと思う。それは、死に対する私の意志である。時々、「天国に行ったお父さん」と言っておいて「ご冥福をお祈りします」と言う人に出くわすことがある。不覚悟である。

エリック・クラブトンは息子が天国に行ったと思っているのだろう。“ティアーズ・イン・ヘヴン”で私が好きなのはこの視線である。天国の息子が自分を見ているのである。多くの場合、私が死んでしまったかわいそうな息子を見ている。

我田引水。仏教の場合で話しを進める。「私が死んでしまったかわいそうな息子を思う」と言うのは、思いが私から息子への一方通行である。死んでしまった息子をどうとらえるか。息子は仏と成った。私が息子を思う時、私から仏への矢印が出来る。同時に仏から私を見るまなざしを、仏から私への矢印と考える。つまり私と仏の間に相互方向の矢印ができています。これが大切なのである。私は“ティアーズ・イン・ヘ

ヴン”にこれを感じた。仏の眼差しの中で生きる私がいる。

仏の眼差しの中で生きるとは、「お念仏に生きる」と言える。私には耳にタコができるような言葉である。それは、老人が風呂に入りながら「あ～、ナンマンダブ、ナンマンダブ。極楽やな～」と言って、放屁してまた「ナンマンダブ、ナンマンダブ」と言う光景を思い浮かべてきた。生活の中の念仏である。念仏というと、口称念仏を思う。口に出して称える念仏である。

文字通りだと、念仏とは念ずる仏と書く。仏を思うことである。だから「お念仏に生きる」とは仏を思いながら生きることである。すなわち、仏の眼差しを感じながら生きるのである。そこには、仏と私の相互方向の思いがある。絶望して泣いた人が消えることのない悲しみを持ちながら、新たな世界を生きる姿を目にする。それは死の意味に出会い、生死の道を歩んでいるのである。

私はそこに居合わせたありがたさを感じる。